

全国同和教育研究協議会 副委員長
三重県伊賀市立柘植中学校 校長

栗原成壽さん



具体的な実践をもとにした「キャリア教育」について語る栗原さん

山口県同教育研究協議会が主催する「進路保障」の必要性を報告された。講演の一部概要を報告した。栗原さんのキャリア実践が、子どもたちの就職先や進学先を、その子に導くための指導として探し、指導していただく。進路保障とは、単なる進路のあっせんではなく、子ども卒業後の生活をいかに保障するかを重視したものです。

子どもたちの進路保障をめざす キャリア教育の創造

なつて単身家庭、不安定就労でした。特に母子家庭では、結婚しているときは何らかの仕事をして、その仕事を辞めて

て、部落に帰ってくる母子家庭が多かった。それは、最初から「なりたいたい仕事」「就きたい職業」に就いている訳ではなく「すぐにやめてもいい」という仕事にしか就いていなかったから

育て」としてまでの取り組みの重要性を痛感しました。ここで「進路保障」という言葉が重くのしかかりました。

格差社会は、個々の子どもたちの生活に影響を及ぼしています。一般社会に見える実態・影響は、部落にも当たり前に現れます。部落には、一人親家庭や修学援助など課題が顕著に見えます。逆に言う

「進路保障」ということが大事になっています。

このように、子どもたちの生活状況や生活環境の違いは、生活経験の違いとなって現れます。それは、将来展望にも影響してきます。

その生活経験の違いを埋めることがいかに大事か。

これらの課題を克服するために、柘植小学校では、①マイノリティの子どものために自信と誇り(自尊心)を持たせること、②学力をつけること、③経験を広げ、生活を高めていき、将来を思い描くこと、④その基盤としてのなかまづくり、を柱として取り組んできました。

修学旅行での大学体験や職場体験、多様な人生モデル・職業モデルと出会わせていく体験活動など、学校の人権・同和教育実践の中に「進路保障としてのキャリア教育」を位置づけた実践報告でした。



栗原さんの全体講演の風景

「進路指導」のように中学校・高校卒業時までの取り組みでなく、その子が親になり、保護者になったときに、次の世代の「子

子どもの卒業後の暮らしと生き方には、それまでの教育活動の成果と課題が端的に表れます。だから「進路保障は同和教育の総和」と呼ばれ、解放運動では、これまで差別に負けない確かな力の獲得、高校卒業生用の「全国统一応募用紙」や奨学金制度の充実、企業啓発などに取り組んできました。

これまで栗原さんは「進路保障」というのは、就職や進学地区の子どものための取り組みにもなるの、人生の大半が決まってしまうような社会」と指摘しています。

格差社会が進行する現在では、すべての子どもたちにもこの「進路保障」ということが大事になっています。

「キャリア教育って?」

「キャリア」は「エリート」教育というイメージを思い浮かべますが、そうではありません。

ここでいう「キャリア教育」とは児童・生徒一人ひとりの「勤労観・職業観を育てる教育」(文科省)という意味です。

「進路保障」とはこれまで「進路保障は同和教育の総和」と呼ばれてきました。

子どもたちの卒業後の暮らしと生き方には、それまでの教育活動の成果と課題が端的に表れます。だから「進路保障は同和教育の総和」と呼ばれ、解放運動では、これまで差別に負けない確かな力の獲得、高校卒業生用の「全国统一応募用紙」や奨学金制度の充実、企業啓発などに取り組んできました。

「進路保障」を意識せざるえなかった訳

生活状況の違いが子どもの学力や進路をはじめ、なかまづくり、保護者間の気持のズレなど様々な姿に大きく影響していました。

このように部落の子どもの生活の現実を前にして「生活を高め、未来を保障する」教育活動が出来ているのかが問われました。20年前の教え子が保護者に

「進路保障」とは児童・生徒一人ひとりの「勤労観・職業観を育てる教育」(文科省)という意味です。

「進路保障」というのは、就職や進学地区の子どものための取り組みにもなるの、人生の大半が決まってしまうような社会」と指摘しています。

「教科書は人権課題の宝庫」⑧

宇部・長生炭坑水没事故の教材化に向けて(1)

山口県同教育研究協議会 事務局長 松本卓也

1 宇部炭田の歴史

宇部の歴史を語るべき、炭坑の歴史をはずすことはできない。宇部の近代工業都市への発展は、まさに「炭坑」の歴史とともにあった。250年の歴史をもつといわれる宇部炭田。

江戸時代は、地面に出ていく部分を掘り取る「はぐり掘り」、山間部の地表面に出ていく石炭層に沿って、横穴式に掘り取る「狸掘り」などで石炭を掘り、主に自家用燃料や塩田の燃料として使われてきた。

江戸時代末期、向田きょうだいによる「南蛮車」の発明

により、深い堅坑の底から採炭することが可能となった。明治時代中期、炭坑は斜坑を掘って、海底の炭層を掘り進んでいった。海水の湧出を防ぐために船大工が発明した「蒸し棒」が使われ、石炭産業はますます発展していった。

大正時代になると、まさに時代の花形であり、宇部炭田にさかんな労働者の流入がはじまった。

「ボタ山の見えない炭坑町」という言葉のとおり、炭坑の廃土により海が埋め立てられていった。現在の新川の市街地も工場のある地域もこうして造られていった。

1941年、太平洋戦争が始まった。石炭産業は国策のもとにおかれた。石炭は掘っても掘っても足りなかった。勤労動員による地方の労働者

や朝鮮半島から強制連行によつて連れてこられた人々たちによつて、採炭が行われた。

そして、1942年2月3日、長生炭坑で水没事故が起こった。死者183名という大惨事であった。そのうち135名を越える人々が、朝鮮人であった。この水没事故は、戦時下の事故であり、当時の状況を知らぬ人はほとんどいなかった。

1970年8月13日、西沖ノ山炭坑が閉山し宇部炭田の歴史に幕が下ろされた。

次号に続く(「2 宇部市における朝鮮人強制連行の記録」)

「長生炭坑殉職者位牌 西光寺(西岐波向坂)安置



「長生炭坑殉職者位牌 西光寺(西岐波向坂)安置